

は せ どう かつ せん ず びょう ぶ 長谷堂合戦図屏風

今からおよそ400年ほど前、慶長5年（1600）の秋のことです。日本国中の大名が二つに分かれた、大きな戦いが起こりました。

大阪の豊臣家を守ろうとする西軍、江戸の徳川家康を中心とする東軍。天下分け目の戦いといわれた「関ヶ原の合戦」です。

豊臣五大老の一人上杉景勝かげかつの重臣、直江兼続なほ えかねつぐは2万余りの軍勢をひきいて、徳川方の最上義光を討とうと山形めがけて攻め入ってきました。守る最上軍は多く見積もっても1万たらずという劣勢でした。

直江軍は、まず白鷹山しらたかの北の畑谷城はたやをおそって、9月13日には、城主江口五兵衛光清えぐちごへえあききよ以下三百数十名を全滅させました。つづいて、山形城の南西6キロメートルのところにある長谷堂城に押し寄せました。

城を守っていたのは志村伊豆守光安しむらい すのかみあきやすを主将とする最上の武士たちです。

長谷堂城が落ちれば、山形も戦場になってしまいます。

義光はこの城を守るために全力をあげました。親せきにあたる仙台の伊達政宗だてまさむねにも加勢をたのみました。

「たかが小さな山城一つぐらい」と、上杉軍は3回ほど総攻撃をかけてきましたが、城は落ちません。攻めたり、攻められたり、はげしい戦闘が約半月もつづきます。（屏風右側の場面）

そのうちに、関ヶ原の合戦で徳川方が勝ったという知らせがとどき、「戦いも、もはやこれまで」と、上杉軍は困みをといて退き、それを最上軍は追撃します。（屏風左側の場面）

この戦いを「長谷堂合戦」といっています。

この屏風は江戸時代中期（300年ほど前）に秋田の学者戸部一愨とべいっかんさいまさなお斎正直が描いたものといわれています。

鉄棒を持って戦う最上義光（写真の右側）、鉄砲隊に守られた直江兼続（写真の左側）、そのころの両軍の有名な武将たちや、よろいを着ることもできない身分の低いさむらいたち……。

こまかく見ていくと、そのころの戦いの様子が、いろいろと想像できる屏風です。



最上義光と直江兼続が描かれた左隻部分